

讃美歌21 455 T: Paul Gerhardt 1693
M: England um 1590
Augsburg 1609

- 1 神は私の 強い味方。
誰が私に 逆らい得よう。
すべてのものは はむかうとも
せつに祈れば 逃げしりぞく。
- 2 主イエス・キリスト、その血しおは
私の救い、私の岩。
頼れるものは 他にはない。
この礎に 私は立つ。
- 3 死に至る罪 主は消し去り、
私を洗い きよめられる。
罪ゆるされた このよろこび。
私は歌う、さばきの日も。
- 4 聖なる霊は 私のため
深いうめきで とりなされる。
その霊により 神を「父」と
呼ぶ私こそ 神の子ども。
- 5 大地が裂かれ 火を吹いても、
飢えも渇きも 死も命も、
他のすべても 主の愛から
私を離すことはできない。
- 6 よろこびに満ち 心おどり、
歌声高く み名をほめよう。
主こそ私を 照らす光、
私の歌の 尽きぬ泉。

EG351

1 Ist Gott für mich, so trete gleich alles wider mich; sooft ich ruf und bete, weicht alles hinter sich. Hab ich das Haupt zum Freunde und bin geliebt bei Gott, was kann mir tun der Feinde und Widersacher Rott?

2 Nun weiß und glaub ich feste, ich rühm's auch ohne Scheu, dass Gott, der Höchste und Beste, mein Freund und Vater sei und dass in allen Fällen er mir zur Rechten steh und dämpfe Sturm und Wellen und was mir bringet Weh.

3 Der Grund, da ich mich gründe, ist Christus und sein Blut; das machet, dass ich finde das ewige, wahre Gut. An mir und meinem Leben ist nichts auf dieser Erd; was Christus mir gegeben, das ist der Liebe wert.

4 Mein Jesus ist mein Ehre, mein Glanz und schönes Licht. Wenn der nicht in mir wäre, so dürft und könnt ich nicht vor Gottes Augen stehen und vor dem Sternensitz, ich müsste stracks vergehen wie Wachs in Feuershitze.

5 Der, der hat ausgelöscht, was mit sich führt den Tod; der ist's, der mich rein wäscht, macht schneeweiß, was ist rot. In ihm kann ich mich freuen, hab einen Heldenmut, darf kein Gerichte scheuen, wie sonst ein Sünder tut.

6 Nichts, nichts kann mich verdammen, nichts nimmt mir meinen Mut: die Hölle und ihre Flammen löscht meines Heilands Blut. Kein Urteil mich erschreckt, kein Unheil mich betrübt, weil mich mit Flügeln decket mein Heiland, der mich liebt.

7 Sein Geist wohnt mir im Herzen, regiert mir meinen Sinn, vertreibt Sorg und Schmerzen, nimmt allen Kummer hin; gibt Segen und Gedeihen dem, was er in mir schafft, hilft mir das Abba schreien aus aller meiner Kraft.

8 Und wenn an meinem Orte sich Furcht und Schrecken find't, so seufzt und spricht er Worte, die unaussprechlich sind mir zwar und meinem Munde, Gott aber wohl bewusst, der an des Herzens Grunde ersiehet seine Lust.

9 Sein Geist spricht meinem Geiste manch süßes Trostwort zu: wie Gott dem Hilfe leiste, der bei ihm sucht Ruh, und wie er hab erbauet ein edle neue Stadt, da Aug und Herze schauet, was es geglaubet hat.

10 Da ist mein Teil und Erbe mir prächtig zugericht'; wenn ich gleich fall und sterbe, fällt doch mein Himmel nicht. Muss ich auch gleich hier feuchten mit Tränen meine Zeit, mein Jesus und sein Leuchten durchsüßet alles Leid.

11 Die Welt, die mag zerbrechen, du stehst mir ewiglich; kein Brennen, Hauen, Stechen soll trennen mich und dich; kein Hunger und kein Dürsten, kein Armut, keine Pein, kein Zorn der großen Fürsten soll mir ein Hindrung sein.

12 Kein Engel, keine Freuden, kein Thron, kein Herrlichkeit, kein Lieben und kein Leiden, kein Angst und Fährlichkeit, was man nur kann erdenken, es sei klein oder groß; der keines soll mich lenken aus deinem Arm und Schoß.

13 Mein Herze geht in Sprüngen und kann nicht traurig sein, ist voller Freud und Singen, sieht lauter Sonnenschein. Die Sonne, die mir lachtet, ist mein Herr Jesus Christ; das, was mich singen machet, ist, was im Himmel ist.

「新しい歌を、歌えるのか」

詩篇98:1(-9)

「新しい歌を、主に歌え。主は奇(くす)しいみわざを行われた。…全地よ、主に喜び叫べ。大声で叫び、喜び歌い、ほめ歌を歌え。…豎琴に合わせて。ラッパに合わせ、角笛の調べにのせて。…世界とその中に住む者よ。鳴りとどろけ。もろもろの川よ、手を打ち鳴らせ。山々もこぞって喜び歌え。…主は、地を裁くためにこられる。」(新改訳)

新型コロナウイルスに対するmRNAワクチンは、2回接種することで、体内に抗体を形成する効果が接種者の90%以上で確認されるという革新をもたらし、これが経済の先行き予想にも影響を与えています。

ワクチン接種が各国で進むなか、コロナ危機下で非常に格差の大きい「K字型」の経済回復とならざるを得ないのに、これが「V字型」、少なくとも「U字型」回復になるという希望的観測が株価を高めてきました。

同時に、先週以来、アメリカでインフレ懸念が急に高まり、長期金利の上昇傾向から、これまで上昇基調にあった資産価格が調整局面に入る可能性もあります。その結果、各国で株が売られて、株価は世界中で乱高下しています。それでも、コロナ危機後に傷んだサプライチェーンの修復で、インフレが鎮静化する場合、金融政策の転換が急速に起こることはないと考えられます。

国境で、「ワクチン証明書」を提示することで、検疫による待機期間を短縮して、人の国際移動が円滑化することへの期待もあります。しかし、最近、空港における検疫で、変異株の感染が見落とされていたケースや、自宅待機が追跡できないケースも発覚し、国際線利用者の事前又は事後の検査において作業が複雑になり、水際での対策に、緊張が高まっているのです。

今日の聖書は詩篇98篇です。詩篇96篇と似て、同じ作者かもしれませんが。詩篇33篇とも内容的に近いのです。それらは、「(神への)讃歌」として編集されていて、そこには、ダビデ王による讃歌が多く含まれています。しかも、人による神への讃美だけでなく、動植物や山や川による讃美も含まれるので、現代人が、これを理解するのは容易ではないと思います。

どうか思い出してください。ダビデは、父のもとで羊飼いとして育ち、豎琴を奏でる音楽家であったことです。そのダビデが、時のユダヤ王国のサウル王によって登用され、現在のエルサレムを奪取し強固なイスラエル王国を建設し、多くの詩篇を残しました。

当時、音楽とは「神への讃歌」を意味しました。聖書と音楽との関係は、ダビデが音楽家であったと考えると、極めて密接な関係だったことから明らかです。

宗教改革について、マルティン・ルター自身、その書簡で、音楽を「神の言葉の次に大事なもの」と表現したことは、ルターの宗教改革が教会音楽の改革と普及に非常に力を入れた証拠です。聖職者の詠唱や、聖歌隊の合唱で、讃美歌をうたうのではなく、会衆自身が、斉唱(ユニゾン)で共にうたうことは、私たちが、メロディーとともに、聖書のことばが、心のなかで響くようになることを意味しました。

これに対しジャン・カルバンの系譜とされる改革派のなかには、教会音楽を奏でることを禁止する教会もありました。しかし、カルバン自身は詩篇を愛し、「ジュネーブ詩篇歌」とよばれる讃美歌の編集に熱心であったのです。日本の「讃美歌21」の113から162番に、詩篇歌が取り入れられたことは、素晴らしいことです。その後の改革派教会の欧州及び北米やアジアなどへの展開は多様で、教会から音楽を追放したという事実はありません。

音楽の私たちの心に及ぼす作用は、予想を超えるものです。讚美歌を歌うことで、民衆の感情を高揚させ、人々を戦いに動員するために誤用し、人間が神様を利用した歴史を、忘れることはできません。

1つの具体的な例は、16世紀に、農民による暴動を主導したトマス・ミュンツアーの場合で、農民たちが、讚美歌149篇の「王たちを鎖に、貴族たちを鉄のかせにつなぐ」を歌って、戦いに赴いたといわれます。

また1つの悲しい例は、1930年代、ドイツで政権を奪取したナチス(国家社会主義党)の場合で、党大会に当たって、マルティン・ルター作曲の「神はわがやぐら」(Ein fester Burg ist unser Gott)を歌って、党員を鼓舞したといっています。これも、聖書(詩篇46篇)で、ナチスの戦争政策を正当化する結果になりました。

皆さんは、「神を讚美せよ」という言葉を、深く考えたことがありますか。「力を求める」ために、神様を賛美するようにならないよう、十分に警戒しなければなりません。そこでは、自分たちに力を与える神を讚美する意味に転換されているからです。翻訳された歌詞は、しばしば単純化され、作詞者の心を理解していない場合があるので、注意が必要です。

実際、讚美歌の歌詞は、多い場合は、1番から10番以上にわたりますが、これらが、全体として聖書の言葉をメロディをもって伝えているのです。

讚美歌が、誤用される背景に、聖書の意味を現代の私たちが、理解しようとしないう怠慢と、現代における私たちの言葉の感性の衰退があると思います。これについては、「経済と人間」のチャペルでも、一緒に考えてみましょう。

新しい歌とは、私たち人間を新しくしてくれる歌です。それは、私たちから不安や恐れを取り除き、新たな希望や新たな信頼を生み出してくれる歌であるはずです。

こういう歌は、私たちが不安や苦しみに満ち、死への恐怖にさらされている時に、つくられたものでしょう。泣く人々を喜びに導き、過去の負債にとらわれた者を、未来への希望と勇気に導くものでしょう。

17世紀後半以前の讃美歌で、特に、宗教改革の精神が生きている讃美歌には、こうした歌が多いのは、決して偶然ではないのです。

それは、自分が「強くなることを求める」歌ではないからです。分断された人々との信頼を生み出し、つながりを回復させ、生きる勇気を与えるものだと思います。

そこには、人間が破壊し続けてきた地球環境や動植物たちとの対話と共存の願いが含まれています。そのことを忘れないでください。そういう願いが、人々の心のなかで芽をだして、育ってくれることを祈ります。

詩篇98篇の「新しい歌を、主に歌え」というのは、いつも繰り返すだけの、決まり文句ではありません。現在のコロナ危機のなかで、「新しい歌」を歌えるかどうか、私たちの生死と次の世代の未来がかかっているのですから。